AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2017.9) 平成28年度:69.

炎症性腸疾患患者の食生活の行動変容への看護支援―独身男性に焦点をあてて―

田中 美菜弥, 伊藤 沙弥香, 本田 優衣

炎症性腸疾患患者の食生活の行動変容への看護支援

―独身男性に焦点をあてて―

キーワード：炎症性腸疾患、食生活、独身男性

○発表者名・共同研究者名：○田中美菜弥、伊藤沙弥香、本田優衣

所属施設名：旭川医科大学病院 6 階西ナースステーション

Ⅰ. 目的

青年期に IBD（炎症性腸疾患：inflammatory bowel disease、以下 IBD とする）を発症し、食生活管理を主に自分で行ってきた独身男性の食生活体験のプロセスを明らかにし、有効的な看護支援を検討する。

Ⅱ. 方法

1) 研究期間：2015 年 9 月～2015 年 12 月
2) 対象者： 10 代～20 代で発症し、発症後に独身経験がある現在緩解期の IBD 男性患者
3) 方法：質的記述的研究。「食生活に対する思い」、「食生活管理を行う上で困難だったこと」について半構成的面接を行った。データから逐語録を作成し、コード化・カテゴリー化した。

Ⅲ. 倫理的配慮

対象者には口頭及び文書により研究の趣旨、プライバシーの保護、匿名性の確保、研究協力への自由意志の保障、協力しなくても不利益が生じないことを説明し、書面にて同意を得た。本研究は旭川医科大学病院倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅳ. 結果

1) 患者紹介：A 氏、40 代男性。クローン病と診断されて 33 年経過し、2 回の手術を経験した。現在はインフリキシマブ投与を継続しながら外来でフォローされている。
2) 独身男性の食生活体験のプロセスとして、37 の「コード」、7 の＜サブカテゴリー＞、3 の≪カテゴリー≫を抽出した。≪食生活への関心の変化≫は＜自覚症状がないため食生活に関心をもてない＞＜一生付き合わなくてはいけない疾患であり食生活に関心をもてない＞＜再狭窄への恐れが生じ食事内容を意識した＞、≪経験や仲間との交流を通しての学習≫は＜試行錯誤の体験学習＞＜栄養相談で知識を得る＞＜同じ疾患をもつ患者から食生活管理について影響を受ける＞、≪生活に折り合いをつけることを学ぶ≫は＜自ら職場に疾患について伝え食事管理しやすい環境を整える＞＜自分に合った食事制限方法を獲得する＞で構成された。

Ⅴ. 考察

吹田、鈴木（2009）は、クローン病患者の食生活体験として、「体験学習による食生活への再構築」プロセスを明らかにしており、それは「食事栄養療法への反応」、「再燃を起とした学習サイクル」、「自分に合った食事制限法の獲得」という 3 つの段階から構成されると述べている[1)]。A 氏の場合、当初は自覚症状がないことや、一生付き合わなくてはいけない疾患であるため、食生活への関心をもてない状態であった。しかし、狭窄を経験し再狭窄への恐れが生じたことで≪食生活への関心の変化≫がみられた。栄養相談や食生活経験、仲間との交流を通して、症状コントロールできる食生活を学んでいた。そして、自分の体と向き合い食生活と症状との関係をマネジメントして、失敗や再燃を経験しながら≪生活に折り合いをつけることを学ぶ≫というプロセスを辿っていた。看護者は患者が食生活体験を振り返り、食生活と症状の関連に気づけるよう話を聞いていく必要がある。食生活や社会生活を制限しすぎず、病状が悪化しないように折り合いをつけながら生活できるよう導くことが QOL を上げる支援につながる。

さらに、A 氏の場合、自身で食生活管理をする必要があり、周囲から得られるサポートが少ない状況であったが、早期に職場に疾患の内容を伝え、自ら食生活を管理しやすい環境を整えられていた。また、同じ経験を経ている仲間との交流を通して、気持ちや体験の共有をすることで自己管理能力を高めることができていた。このように≪経験や仲間との交流を通しての学習≫が重要であり、患者会など、早期から仲間との交流ができる場の紹介をすることがその後の患者の食生活管理につながると考えられる。

Ⅵ. 結論

1) 独身男性の食生活体験のプロセスとして≪食生活への関心の変化≫、≪経験や仲間との交流を通しての学習≫、≪生活に折り合いをつけることを学ぶ≫が明らかとなった。
2) 看護支援として患者が食生活体験を振り返り、食生活と症状の関連に気づけるよう話を聞いていくことや、早期から仲間との交流ができる場の紹介をすることが有効的な看護支援であると示唆された。

Ⅶ. 引用文献

・吹田麻耶、鈴木純恵：クローン病者の食生活体験のプロセス，日本看護研究学会雑，32(5)，p19～27.（2009）